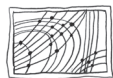


テオ・ヤンセン展 砂浜の生命体「ストランドビースト」

(2023年10月27日～24年1月21日  
千葉県立美術館)



入場したとたんに瞠目した。ナンジャ、コリヤと思わず声が出た。何とも奇妙な物体が展示されている。人の等身大から十メートルを超えるものまで十体以上。これらが、風を動力源としてオランダの砂浜を駆け抜けるストランドビースト(砂浜の生命体)なのだ。ボディ全体は大量の黄色いプラスチックチューブで造形され、物理工学を基盤とする(?)その動きは映像で見ても生き物を思わせる程に実に滑らかである。しかも、一九九四年に誕生して以来、歩行、方向転換、危険察知などの機能を備え今も進化を続け砂浜で生き残るための術を磨いているという。

作者の故郷オランダは国土の半分が海抜一メートル未満、海面上昇から国土を守るため、海岸線を守る生き物としてストランドビーストを考え出したという。一九四八年生れ、芸術家、発明家、科学者の顔を併せ持ち「現代のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と称されるテオ・ヤンセン。次に世に問うストランドビーストは如何なる姿なるや、楽しみだ。

(上野隆紘)

高樹のぶ子著『小説小野小町 百夜』  
町はどんな女ひと

(2023年5月18日、7月19日  
日本経済新聞出版)



三年前、同じ著者の『業平』を読んでおもしろかったので、昨年出た小野小町を主人公にした『百夜』も読んでみた。小野小町は著名な歌人でありながら、史料が乏しく、実像は模糊としていて、謡曲の「卒塔婆小町」「通小町」のイメージもある。どのように小説に造形されるのか、と思つて読み始めたが、著者はわずかな歌を手掛かりにして、平安時代に生きた小町に人間の息吹を吹き込んでみせた。擬古文調の文体で、物の怪や祈雨などを交えて当時のもの暗い雰囲気を出しながらも、そのストーリー展開には現代人を納得させる説得力がある。恋の相手が出家前の遍昭とは。後半に出てくる深草少将の百夜通いの伝承を踏まえた章も、綿密な伏線が張られていて小説として読ませる。

『小町はどんな女』は、『百夜』の舞台となった場所や当時の事情をイラスト、写真付きで解説した本で、小島ゆかり氏と著者の対談が載っている。この対談を読んで『百夜』をより深く味わうことができた。また古典和歌についても大いに教えられた。お勧めの二冊である。(田宮富子)